

## 会員通信・News & Comments

魚類学雑誌 68(1):69-74  
2021年4月25日発行

### トピックス

#### 2020年度魚類学会年会（ウェブ大会）の 準備・開催報告

2020年度日本魚類学会年会（2020年10月31日-11月1日）は、本学会として初めての試みであるインターネットを用いたオンライン形式で開催された。このような開催形式の大幅な変更は、2020年初頭から日本でも感染拡大が始まった新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の感染拡大防止のための対策・要請への対応によるものである。オンライン開催という不慣れで不自由な面も多い年会ではあったが、300名以上が参加し、研究発表会を中心に盛況な年会として無事とり行うことができた。まずは発表者、参加者に感謝を申し上げたい。

本報告は、このオンラインによる年会開催の決定経緯、準備、実施、および事後アンケートの結果を取りまとめたものである。多くの魚類学会会員にとって、年に1度の年会はとりわけ重要な意味をもつものであり、この度の年会実施の経緯や内容について記録、共有しておく意義は大きいと思われる。オンライン開催の決定当初は、実行委員一同、経験はもちろん、ほとんど前例や情報もなく、「清水の舞台から飛び降りる」心持ちでスタートしたものである。しかし、年会開催の時期にはすでに多くの学会の集会在オンラインで実施され、オンライン開催は通常の景色となっていた。本稿は、このようなめまぐるしい状況の変化のもとでの半年弱の経緯を記録するものである。

なお、下記のとおり、2020年度の年会は日本魚類学会幹事会の責任のもとで行われ、年会実行委員会の半数が幹事会メンバーであったことから、本稿ではまず、幹事会、理事会、および代議員会による議論の経緯について記すところから始めたい。

#### 1. 通常年会の中止とオンライン開催の決定

**長崎大会の中止** 東京都等への非常事態宣言が発令されて間もない2020年4月13日、2019年度第3回幹事会（学会年度は8月から翌7月）において、COVID-19の感染拡大の現状を踏まえ、2020年9月に長崎大学で予定されていた第53回年会（長崎大会）の中止が提案された。この幹事会自体、初めてオンラインで開催されたものであった。代議員会での電子メールによる意見聴取の結果を踏まえ、4月30日に2019年度第7回理事会（メール）で、正式に長崎大会の中止（2023年度に延期）が決定された。長崎大学を中心とした実行委員会のそれまでの

準備の労を察し、心痛む決定であった。翌5月1日には、学会ウェブページや学会メールマガジンを通じて、会員に長崎大会中止の周知が行われた。

**オンライン開催の検討** オンライン開催については、4月の幹事会において、その可能性が一部参加者より提起されていた。しかしまだ大学等でもオンライン授業が模索されていたような時期であり、年会のオンライン開催のイメージがもちにくく、さらにウェブカメラなどの入手が困難にもなっていたため、通常年会の中止と同時にオンライン開催を提案できる状況にはなかった。

幹事会では、5月中旬、メール会議により、オンラインによる研究発表会の可能性を議論し、5月22日に篠原会長により、幹事会の責任のもとで開催を検討する方針が打ち出された。この決定は、年会が学会の最重要行事の一つであり、とりわけ若手の研究推進・育成にあたっては重要な場であること、そして困難な中であっても最大限の開催努力をすべきだという考えに基づくものであった。篠原会長を年会大会長とし、渡辺理事を実行委員長、また年会担当庶務幹事（宮崎）をはじめ、約半数の幹事をまず実行委員として、実行委員会の組織が開始された。

5月下旬、実行委員長や年会担当庶務幹事の呼びかけに応じ、電子情報委員会委員長（中山）、次期年会大会長（小北）、そして「日本魚類学会若手の会」の日比野会長をはじめとする世話人4名が実行委員会に参画することになった。若手の会では、例え年会が開かれずとも、なんらかの研究集会を行うことを計画していた最中であった。以上の計11名（文末に記載）で、5月29日には第1回実行（準備）委員会をオンライン（遠隔ビデオ会議ソフト、Zoom）で開催し、まず年会の開催形式に関する概要を議論し、原案を取りまとめた。

**オンライン年会の開催決定** 実行委員会による原案を幹事会で確認したのち、代議員会において、オンライン年会の実施、実行委員会組織、会の名称、時期、概要等に関し、メール会議により意見聴取を行った（6月4日-11日）。代議員からの意見は概ねオンラインによる研究発表会の実施に前向きであったが、特にオンラインによる研究発表会の位置付けやそれに関係した名称については、理事からも含めて様々な意見が出された。長崎大会に代わる第53回の年会（開催方法の変更）として位置付ける原案から、これまでの年会とは切り離れた「第1回オンライン研究発表会」とする案までが検討され、「年会」への思い入れやオンライン形式に対する受容、抵抗、経験についての会員を代表する多様な意見が表れたものと思われる。

幹事会、また理事会での意見交換・議論を踏まえ、最終的に、第53回（長崎大会）はすでに中止が周知され

たものとし、その次の第54回をオンライン形式で同年に開催するものとして位置付け、「2020年度日本魚類学会年会(ウェブ大会): The 54th Annual Meeting of the Ichthyological Society of Japan, 2020 (Web Meeting)」が会の正式名称となった。また開催時期も、発表準備等を憂慮する代議員からの意見を踏まえ、1ヶ月半ほど遅らせることとした(9月中旬から10月30日-11月1日に変更)。

技術的、立場的な要因で、会員の参加に不公平が生じる懸念についても議論が行われた。これについては、これまでの通常年会であっても、遠方への旅行を伴うことを中心に、会員によっては参加に大きな制約が存在し続けてきたことを改めて認識する契機ともなった。議論を踏まえ、今回の大会においては、いかに参加へのハードルを低くするかが常に念頭に置かれることとなった。これは、詳しい参加マニュアルの提供、参加方法のオンライン説明会の実施、発表・参加の無料化、事前登録の省略などに反映されることとなった。

## 2. 開催準備

**開催準備の方法** 実行委員会における年会開催準備はすべてオンラインで行われた。全体での実行委員会会議は、Zoomを用いて、5月29日(準備委員会)、6月15日、11月6日(ポスター発表終了日)の計3回実施した。それに加え、主に6つに分けたワーキング・グループ(WG)のうち、登録・周知WG(7月2日)と研究発表会WG・懇親会WG(7月29日)を同じくZoomを用いて開催し、各種議論や決定を行った。

そのほか、日常的に、メーリングリスト(約300通)、およびSlack(約1900通)を用いて、実施内容、形式、ツール、マニュアルなどについて議論や作業を重ねた。

**開催形式・ツールの決定** 委員の経験や他学会の開催様式等をもとに実行委員会とWG会議で議論を重ね、口頭発表・懇親会にはZoomミーティングルーム、ポスター発表にはGoogleドライブによるPDF掲示、質疑応答にはSlackを活用することとした。また、オンライン開催の特性上、一度もポスター発表者の顔を見ない状況も考えられたため、ライトニングトーク(口頭による短い発表紹介)も取り入れることとした。発表形式の代替案として、研究発表でのZoomのウェビナーの使用、ポスター発表等でのLINC Bizの使用、そのほかのツールの使用も検討した上で、機能や経費の観点から、上記の開催形式の大枠を7月29日の研究発表会WGでとりまとめた。

会期の1ヶ月余り前の9月後半にZoomの機能変更があり、ブレイクアウトルーム(ミーティングルーム内の小分けの小会議室)への参加者の自由な移動ができるようになったため、懇親会用に多数のミーティングルームを開設する当初計画を取りやめ、この機能を全面的に活用することとした。

発表・参加費はできるだけ多くの会員が参加しやすいように無料とし、また参加の事前登録を不要とした。このことと情報安全性の観点から、今回の参加は会員限定

とした。

オンライン開催が初めての試みであることもあり、会期と内容を縮小した。会期は2日間とし、1日目に口頭発表2会場、学会賞関連行事、および懇親会、2日目にポスター発表とそのライトニングトーク、そしてフォーラムを行うこととした。フォーラムは、長崎大会に申し込まれていた3件のシンポジウムがキャンセルされたこともあり、編集委員会から提案されたものである(「会員と一緒に考える!学会誌のあり方フォーラム」)。

準備の過程で、全体の運営の流れを明確にし、また記録するために、「運営の手引き」を研究発表会WG・懇親会WGの日比野が中心となって作成した。

**会員への周知・発表登録** 年会の案内や登録のために、学会ウェブページとは別に、独自の大会ウェブページを立ち上げた(7月9日; <https://sites.google.com/view/isj2020/>; 図1)。これは無料で即時、自由にページを更新できるようにするためであり、今回の年会の情報発信において中心的かつ有効に活用された。また学会のメールマガジンとウェブページも補完的に用いた。大会ウェブページや登録フォームの作成は登録・ウェブWGの川西(若手の会)が、学会メールマガジン・ウェブページについては中山が主に担当した。大会ウェブページは、年会の終了まで最新情報や各種案内のために継続的に更新された。外国人会員については例年通りメールでの受付とし、英文案内を学会HPに掲載したが、今回、申し込み等はなかった。

2020/10/31 (土) - 11/1 (日)

### 2020年度日本魚類学会年会(ウェブ大会)

The 54th Annual Meeting of The Ichthyological Society of Japan (Web Meeting)

本年度の年会メインプログラムは観覧のうちに終了しました(Slack上での質疑応答およびポスター会場閲覧は11月6日まで可能です)。多数の皆さまのご参加、誠にありがとうございました。

2020年度日本魚類学会年会(ウェブ大会) 実行委員会

#### 更新情報

- 2020年10月30日 年会当日の会場情報をお知らせ(学会ウェブサイト上のマイページ内)
- 2020年10月18日 学会ウェブサイト更新(登録修正および発表中止議題の記載)
- 2020年10月18日 『参加の申し込み ver. 2.0』を公開(ポスター作成ルールの修正、slackワークスペース名の記載修正、休館室情報の追加等)
- 2020年10月16日 『フォーラム』に関する情報を掲載
- 2020年10月15日 『参加の手引き ver. 2.0』を公開(懇親会参加方法の簡略化、Zoomアプリの追加、登録リストの追加等)
- 2020年10月15日 『ポスター発表者のポスターへの参加票の取付方法と印刷』を掲載(10月26日開始-28日17:00開始)
- 2020年9月28日 『懇親会』に関するお知らせを掲載
- 2020年9月18日 学会ウェブサイト更新
- 2020年9月18日 2020年度学会賞の発表者を掲載

#### スケジュール

- 研究発表会(9月-10月) 10月31日(土) 17:00開始-11月1日(日) 17:00開始
- 懇親会(10月) 10月31日(土) 17:00開始-11月1日(日) 17:00開始
- 年会プログラム(開催) 公開(10月4日) 10月4日(日) 17:00開始-11月1日(日) 17:00開始
- 講演発表(10月) 10月19日(土) 17:00開始-10月20日(日) 17:00開始
- 懇親会(10月) 10月26日(土) 17:00開始-10月28日(日) 17:00開始
- ポスター発表(10月) 10月26日(土) 17:00開始-10月28日(日) 17:00開始

#### ウェブ大会開催にあたって一学会長・大会長挨拶

50年以上の歴史、無事文部科学省に日本魚類学会で実施した自学会(研究奨励)も、いまが改革に待たない重要なポイントである。新型コロナウイルス感染症の流行で、開催が延期となったことが、学会にとって大きな課題となりました。今年度の年会開催は、会員からの賛同と理解を得ることができず、延期となりました。今年度の年会開催は、多くの会員からの賛同と理解を得ることができず、延期となりました。

参加や発表にはPCやインターネット環境が必要となりますが、ハードルは高くありません。今回はZoomの活用を促し、参加しやすさを重視しました。これまでの年会と同様です。特に研究発表に必要なのは、発表資料の準備と発表です。

多くの会員の賛同と理解を得ています。

学会長・大会長 藤原 誠

図1. 2020年度日本魚類学会年会(ウェブ大会)のウェブページ(トップページ)。

発表登録には Google フォームを用い（8月3日-31日）、計 118 題の発表申し込みがあった。これらについて、プログラム・要旨 WG として木村と遠見（若手の会）が中心となり、口頭発表数の調整およびプログラムの編成・作成を行った。入力例を明示したものの、テキスト入力での登録であったこともあり、明らかな誤記や体裁の不具合が多数見られた。そのため発表者校正を急遽行うことにしたが、その際に共同発表者やタイトルの変更など校正の域を超える要請が多数あり、想定外の手間を生じた。また口頭からポスターへの発表形式の変更（計 16 件）について、事前承諾を得ていたにも関わらず、依頼時に断られるケースが少なからずあり、連絡・調整等に想定外の手間を必要とした。その結果、予定よりも若干遅れた 9 月 18 日にプログラムを公開するに至った。

発表要旨は、編集作業の簡便化を計画し、書式情報入りの様式（Microsoft Word ファイル）を大会ページに置き、メールにより提出することとした（9月1日-30日）。講演要旨集はプログラム同様、プログラム・要旨 WG が編集した。要旨においても、書式変更や誤記、追加修正、提出遅延などが多くあり、想定以上の労力と時間を要した。要旨集は、学会ウェブページ内の会員個人ページ（マイページ）でダウンロードできるようにした（10月20日；図2）。なお、要旨提出時に 1 題のキャンセルが生じ、「発表中止」として扱った。

今回、要旨集の印刷は行わなかった。これは、オンライン大会であり、参加者自身で様々な閲覧の仕方が可能

であること（印刷、画面等）、要旨集を印刷しない場合、要旨の提出期限を遅く設定できること、経費がかからないこと（参加費無料化と関連）、国会図書館への納本が必須ではないと判断されたことなどによる。

**発表・参加方法の説明** 大会ウェブページでの説明に加え、多くの会員にとって初めてのオンライン学会参加であることを想定して、できるだけ発表や参加に対する技術的・心理的なハードルを下げることを目的に、発表申し込み期間中に詳細な参加マニュアル（「参加の手引き」）を提供した。このマニュアルは研究発表会 WG の日比野と渡辺が中心となって作成し、ver.1.0（8月19日）、1.1（8月24日）、2.0（10月1日）、2.1（10月18日）を大会ページからダウンロードできるようにした。

さらに発表や参加への不安やトラブルを事前に軽減するために、10月10日と10月16日に各1時間半の「接続テスト」を Zoom 上で実施した。接続テストでは、事前に進行者用の「接続テストの実施手引き」を作成し、Zoom と Slack の基本的な説明、案内、質問受付を遠見（10月10日）と日比野（10月16日）が行った。両日でのべ 100 名余りの参加者があり、目的を果たしたと思われる。

**座長の選定と依頼** プログラムの決定後、プログラム・要旨 WG の木村と日比野が中心となり、9月下旬に座長を選定し、依頼を行った。座長は発表を行う一般会員から選定することとした。通常の年会と比べて一般会員による発表数が少なかったことから選定に苦慮したが、計 10 名の会員に快諾いただいた。座長が技術的な不安をもたずに役割を果たしてもらえるように、座長と会場係（実行委員が分担）の役割分担とトラブル時の対処を記した「口頭発表座長マニュアル」を日比野が中心となり作成した。

**ポスターの提出・掲示** ポスター発表用のポスターは、メールにより、PDF 形式で事前に提出することとした（10月26日-28日）。研究発表 WG の木村（ポスターの受付）と日比野（掲示作業）が担当し、年会前日の 10 月 30 日午前までに Google ドライブに掲示した。さらにトラブル時のバックアップのため、Dropbox Professional にも同様のページを準備した。

### 3. 当日運営

**当日の会場案内と受付** 年会前日の 10 月 30 日に会場総合案内ページを開設し、各会場の Zoom ミーティングルームの URL を掲示した。会場は会員のみ知らせるために学会ウェブページ内のマイページにリンク先を掲載したが、接続集中によるトラブルを回避するために学会メールマガジンでも同様の情報を送付した。

会場総合案内ページのトップには年会受付（Google フォーム）へのリンクを設置した。必ずしも受付をしなくても会場に入室できるため、正確なアクセス数は不明であるが、明らかな同一人物の重複を除き 344 名の登録が認められた（一般 231、学生 106、名誉 2、団体 5；実行委員を含む）。

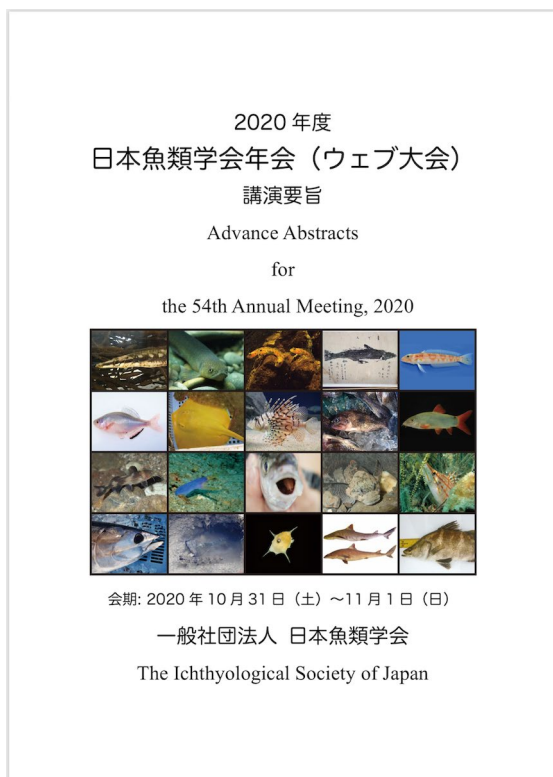


図 2. 講演要旨集（表紙）。





図3. 学会賞授賞式の風景 (Zoom 画面を編集)。

**研究発表会・学会賞授賞式** 当日の研究発表会等の運営は、Zoom のホスト、予備ホスト、会場係などの担当をあらかじめ決め、Slack で適宜連絡を取り合った。

口頭発表は1日目に2会場ととり行われ、計45題の発表が行われた。Zoom の入室記録には679名が認められ(ただし同一人物の異なるログイン名を重複して計数)、実際に会場に同時に入室していた人数は、2会場それぞれ、最大100-120名程度であった。口頭発表における進行上のトラブルはほとんどなかったが、会場係の鈴の音が聞き取りにくい(ノイズとしてキャンセルされやすい)ことがあった。発表直後の質問は通常よりも少ないように感じられた。

ポスター発表は計72題あり、ポスターのPDFをGoogleドライブに置き、インターネットブラウザに備わっているプレビューとファイル内容の表示機能によって閲覧できるようにした。拡大等も簡単にでき、通常の混み合った会場に比べ、閲覧性は優れていたといえるだろう。PDFのダウンロードはGoogleドライブの機能を用いて制限したが、スクリーンショットなどは可能なため、大会ウェブページや参加の手引きなどで、録音・録画、スクリーンショットの禁止を会員へ周知した。

ポスター発表に対する質疑にはSlackを用い、発表ごとに小分けされた「チャンネル」を提供し、発表者や参加者がテキストあるいはビデオ通話などで自由に議論ができるようにした。同様に口頭発表についても、「発表後、休憩時間等に話しかけられる」状況をイメージして、Slackで発表ごとにチャンネルを設け、時間を選ばず質疑応答ができるようにした。ポスターの掲示(不掲示を希望したもの以外)とポスターおよび口頭発表に対するSlack上の質疑応答は11月6日まで継続し、全体として盛り上がっていた様子であった。

今回、ポスター発表者が自らの発表を多くの参加者にアピールできる場として、各人1分間のライトニングトークの時間を2回に分けて設けた(2日目午前)。これは今回、通常のポスター発表会場のように入室時にポスターや発表者が自然に目に入ることがないため、できるだけ多くのポスター発表に興味を持ってもらうための工夫であり、一定の効果があったと感じられた。

1日目の口頭発表の後、幹事会からの連絡および学会

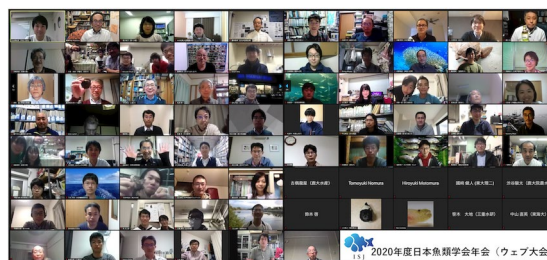


図4. 懇親会時の集合写真 (Zoom 画面を編集)。

賞授賞式(奨励賞・松沼瑞樹氏、論文賞・山口敦子氏と武藤望生氏)と奨励賞受賞講演(「インド・太平洋における浅海性魚類の分類学的研究」)が行われた。学会賞の賞状や副賞は事前に郵送等がなされていたが、会長と受賞者をZoom上でスポットライト機能を用いて固定し、賞状の授与等を模することで、できるだけ授賞式の雰囲気が出るように演出した(図3)。

**懇親会** 懇親会は1日目の18時30分から、Zoomミーティングルームとそのブレイクアウトルーム機能を用いて行われた。全体の催しが行われる総合懇親会場と、個別のテーブルでの懇談を模した小テーブル(ブレイクアウトルーム)を多数用意し、参加者が自由に小テーブルを移動しながら交流できるようにした。

懇親会では、懇親会WGの日比野の司会・進行のもと、まず総合懇親会会場で会長からの挨拶、松浦啓一名誉会員による挨拶と乾杯、後藤 晃新名誉会員の紹介と一言、そして学会賞受賞者(3名)からの一言をいただいた。続いて演奏の配信を行った。これは、会員の苦難と今年惜しくも亡くなられた魚類学者たちに想いを寄せる時間をもちたいという実行委員会の考えによるものであった。実行委員長からの依頼に快く応じてくれた、ある会員夫妻によるピアノとピアノの深く心温まる演奏を配信することができた(エンニオ・モリコーネ作曲「ガブリエルのオーボエ」)。

演奏配信の後、「集合写真」(図4)を撮影し、小テーブル、あるいは総合懇親会場で懇親・交流が行われた。予定された懇親会時間(20時30分)の終わりに、次期大会長の挨拶、そして大会長からの中締め挨拶が行われ、その後深夜まで懇親会は継続された。

懇親会の参加人数はログイン数で80名程度と期待よりも少なめであり、これは参加者の「オンライン懇親会」への慣れやブレイクアウトルーム機能についての周知が不十分であったためかもしれない。一方、参加者においては活発に懇親・交流がなされていた。今後、事前周知の工夫、あるいは会員各自の慣れにより、このようなオンライン懇親会の効果はさらに上がりうると思われる。

**フォーラム** プログラムの最後、2日目の午後には、編集委員会による「会員と一緒に考える!学会誌のあり方フォーラム」が開催された。学会誌の現状や課題等に関する4題の話題提供が英文誌、和文誌各主任や編集委員長からなされ、その後パネルディスカッションとして

話題提供者と参加者との間で様々な議論や意見交換が行われた。参加者の関心の高さは、フォーラムを予定時間で一旦終了した後、さらに1時間以上、議論が継続したことから伺えた。また、この議論の延長やチャット機能を利用した参加者からのコメントなど、オンライン開催の利点を柔軟に活かした有意義な集会となった。

**休憩室, その他** 休憩室を2部屋 (Zoom) 用意し、ブレイクアウトルームも設置したが、周知や慣れの問題か、利用はわずかであった。

今回、通常年会で行われている書籍オークション、中高生発表会と表彰、優秀発表賞の選考と表彰、および託児所の設置は、オンライン開催が初めての試みであり、運営側の負担を抑えるために行わなかった。今後、年會をオンラインで開催する際には、中高生発表会や優秀発表賞について前向きに検討すべきだろう。また会期中の託児への補助なども検討されるべきだろう。

#### 4. 経費

オンライン開催により新たに必要となった経費は Zoom 契約費のみであり、通常の年會のシンポジウム補助費 (主に会員以外の講演者の旅費) と比べて低額に抑えられ、発表・参加費の無料化が可能となった。ただし、これは発表登録や年會ウェブページの作成、プログラムや要旨集の編集、当日の運営など、すべて実行委員が担った結果でもある。今後オンラインあるいは対面とオンラインの並立 (ハイブリッド) 方式で年會を行う場合、オンライン参加者からの参加費の徴収とアルバイト雇用や業務の外部委託等について検討する必要がある。

#### 5. 事後アンケートの結果

**事後アンケートの実施** 年會に関する事後アンケートを、学会メールマガジン・ウェブページを通じて周知し、実施した。アンケートは内容を実行委員会と幹事会で検討したのち、11月9日から11月23日の間、Google フォームを用いて行われた。

アンケートに対して225名からの回答を得た。回答は年會参加者180名 (うち67名が発表者)、不参加者45名から得られた。アンケート項目や結果の詳細は学会ウェブページ (会員専用ページ) に掲載しているので、そちらを参照されたい。

**オンライン年會への評価** 年會全体としては、「非常に満足」(41%)と「どちらかといえば満足」(49%)で参加者の90%を占め、参加者の一定の満足度を得たと判断された (図5A)。これは、研究発表視聴の快適さや時間的自由度、また経費 (旅費・参加費) がかからなかったことが大きい理由のようであった。口頭発表の視聴体験については「非常に満足」(40%)と「どちらかといえば満足」(54%)で90%以上を占め、ポスター発表についても「非常に満足」(34%)と「どちらかといえば満足」(41%)で75%を占めた (ライトニングトークについては67%)。Slackを用いた質疑応答については、利用者は54%と約半数にとどまり、利用者の60% (全体の32%) が質疑に有効に利用したと回答した一方、利用しなかったが技術的な障壁を理由にできなかったという回答も、利用しなかった人の29%を占めていた。このように質疑における不自由さはあったものの、今回の大会は、多くの会員に対して、研究発表会としての機会を十分有効に提供できたと思われる。

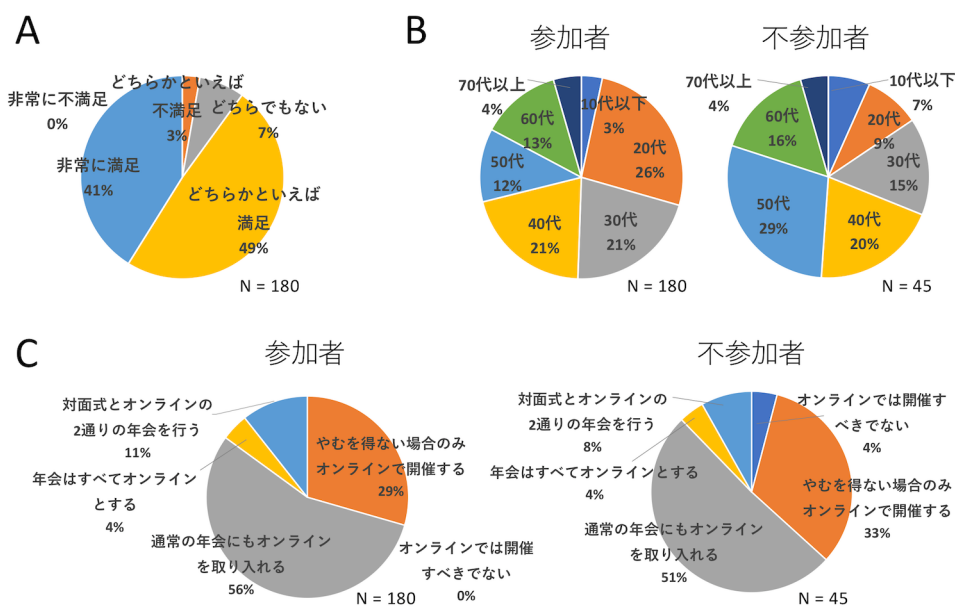


図5. 事後アンケート結果 (抜粋). A, 年會参加者のウェブ大会全体の満足度; B, 参加者と不参加者の年齢層; C, 参加者と不参加者の今後の年會のあり方に対する考え。

一方、懇親会の参加率は回答者（参加者のみ）の35%であり、参加者の満足度も「非常に満足」（18%）と「どちらかといえば満足」（36%）で54%にとどまった。また全体に本大会における会員間の交流については不満足とする意見も見られ、二極化した印象であった。通常の年会で期待される会員間の交流と比べて、オンラインによる交流に劣る面があるのは当然であろう。今回のような状況下で、不十分ながらも年に一度の会員間の交流の場が設けられたことについては、一定の満足度を得たと解釈してよいだろう。

年會に参加したが研究発表を行わなかった108名のアンケート回答者のうち、18%がオンライン開催であることを理由に発表を見合わせたと回答した。理由として、技術的な不安や対面での発表を優先することなどが挙げられていた。逆に発表を行った67名のアンケート回答者のうち、9%が通常の年會なら発表しなかったがオンラインなので発表したと答えた。これには遠方の旅行が難しいことが理由として挙げられていた。開催方法の違いが発表者によって逆の影響を与えうることがわかる。

今回参加しなかったアンケート回答者（45名）のうち、オンライン開催が理由であった回答者は、「参加環境（機器・通信）が準備できなかった」（7%）、「オンライン会議に不慣れなので参加を躊躇した」（15%）、「オンラインなので参加しなくなかった」（9%）を合わせて31%を占めていた。また、回答者のうち参加者と不参加者の年齢構成には明確な違いが見られ、特に10–20歳代の参加傾向（参加29% vs. 不参加16%）と50歳代の不参加傾向（12% vs. 29%）が目立ったが、60歳以上ではほとんど変わらなかった（17% vs. 20%；図5B）。アンケート回答者の偏りも影響すると思われるが、必ずしも高齢会員を締め出すような結果とはならなかったのではないと思われる。

**今後の年會のあり方** 今後の年會のあり方については、参加者、不参加者ともに、通常の年會にもオンライン要素を取り入れるという意見が約半数（56%、51%）を占めた（図5C）。これは、通常の年會において、旅費や参加費等の確保（31%）や日程調整（26%）、家庭生活との両立（5%）、多人数の集會への参加のストレス（5%）などにより、参加に問題を抱えている会員が多いことと関連しているようである。

ハイブリッド形式での開催は、現在のところ、完全オンライン形式よりも技術的・運用上の課題が多く、開催者側への負担の増加にも直結する。しかし、今回の非常時における年會の開催を通じて、オンライン技術の活用の可能性と有望性が明確に認識され、また会員の公平な研究発表会への参加機会に関する議論も深まった。今後の感染症対策などの社会状況を見据えながら、今回の経験や議論を次回以降の年會開催に柔軟かつ合理的に活かしていくことが望まれる。

2020年度日本魚類学会年會（ウェブ大会）実行委員会  
大会長 篠原現人

実行委員長 渡辺勝敏  
幹事会 中江雅典・宮崎佑介・諸澤崇裕  
電子情報委員会 中山耕至  
次期大会長 小北智之  
若手の会 日比野友亮・川西亮太・木村祐貴・  
邊見由美

（2020年度日本魚類学会年會（ウェブ大会）実行委員会；  
連絡先：渡辺勝敏 Katsutoshi Watanabe：〒606-8502  
京都市左京区北白川追分町 京都大学大学院理学研究科  
生物科学専攻 e-mail: watanak@terra.zool.kyoto-u.ac.jp）

魚類学雑誌 68(1):74-76  
2021年4月25日発行

## 追悼

### 白井 滋さん（1957–2020）を偲んで

2020年9月9日東京農業大学生物産業学部アクアバイオ学科教授だった白井 滋さんが亡くなりました。64歳でした。白井さんは日本魚類学会では評議員（2008–2015）や編集委員（2002–2013）を務められました。ご逝去される数ヶ月前から内臓系の病氣と闘っておられたことを後から聞きました。2019年の3月に網走で元気なお姿の白井さんとお会いしていましたので、ご病氣だったことに大変驚きました。

白井さんの板鰐類に関する大きな研究業績（例えば、Shirai, 1992）を振り返ることは、今後の学術研究のためにも重要であると思います。しかし、板鰐類は私の専門ではありませんので、白井さんとの思い出を共同研究や他の魚類学者との関係を書かせていただきます。

白井さんと初めてお会いしたのは、私が北海道大学大学院修士課程1年の時でした。白井さんは同大学院で修士号を取得された後、民間の会社へ就職されていましたが、ツノザメ類の系統分類を研究して博士の学位を取得するために、この翌年に博士課程に入られました。白井さんと私は学年こそ1つ違いましたが、年齢は8歳の差がありました。しかし最初から気さくで話しやすい方でした。当時の水産動物学講座の教官は尼岡邦夫教授、仲谷一宏助教授および矢部 衛助手の3人で、大学院生も大勢いました。卒業研究をしていた学部生を合わせると、ソフトボールチームを2つ編成できるほどの人数に達していたと記憶しています。この頃は昼休みにソフトボールをするのが盛んで（雪が降る季節にはバドミントン）、白井さんはピッチャーとして活躍され、勝利のトロフィーと賞品（日本酒1本）をかけた研究室対抗試合では後藤晃助教授（当時）が率いる発生学・遺伝学講座、宗原弘



写真1. 日本魚類学会年会函館大会（2017年9月）と北海道大学在学中（1982年5月）の頃の白井 滋さん。

幸さん（当時大学院生）の北洋研究施設等の強豪チームを相手にエースの一翼を担って力投されていました。研究室や学年の枠を越えて多くの人とスポーツでの交流も楽しまれていました。

当時の研究室の中でも白井さんはタフで発想に富んだ誰から見ても優秀な院生でした。毎日、軟骨染色したサメ標本の皮膚を解剖用のメスで少しずつ剥がして（削り落としていた時もありました）、骨格や筋肉を観察し、細い線で丁寧にスケッチするという地味な作業をされていた後ろ姿を鮮明に覚えています。平日のある朝のことでしたが、いつもどおりに私が研究室にいくと、早朝から研究を始めていた白井さんが笑顔で「すごいことに気づいちゃった」（言葉は不正確ですが、ニュアンスはこのように感じました）とツノザメ類が多系統群である証拠を発見したことについて話をしてくれました。また博士論文の公開発表会では、スクリーンとスライド映写機を2つずつ用い、他者には簡単に真似ができない素晴らしいプレゼンテーションをされていました。

私が国立科学博物館に就職してから白井さんと再会したのは長崎でした。西海区水産研究所に勤められていました。国立科学博物館の日本列島調査で、白井さんが懇意にされていた漁師さんの船に乗せてもらい一緒に長崎県の魚を集めました。その時の調査結果は Shinohara et al. (1998) にまとめられています。この調査以降、私は白井さんと船で一緒することが多くなりました。白井さんが日本海区水産研究所（新潟県）で働いておられた時には、ちょうど国立科学博物館で日本海の深海生物調査が始まり、調査船を利用した大和堆周辺の水産資源調査によく同乗させてもらいました。この頃には、板鰓類ではなく底生硬骨魚類、甲殻類、巻貝等の資源生態学に完全にシフトされていたようで、ハタハタの集団解析 (Shirai et al., 2006) では、2008年に当学会の論文賞を受賞されました。系統分類学については以前と変わらぬ興味をお持ちでしたが、すでに板鰓類の系統仮説を米国の魚類系統分類学者が編集した *Interrelationships of Fishes* という影響力が大きい書籍に寄稿されていましたので (Shirai, 1996)、形態学では大きな仕事を終わったという感想をお持ちでした。

日本海区水産研究所から東京農業大学生物産業学部（北海道）へ移ることが決まった時には、「これまで以上に一緒に研究をしようね」と声をかけてくれました。白井さんとはその数年前から日本海のゲンゲ科魚類の系統地理を開始し、新種の論文も発表していました (Shinohara and Shirai, 2005)。今後は網走を基地にオホーツク海の魚種に取り組んでみたら面白いという提案でした。白井さんの研究室には何回か研究のためにお邪魔しましたが、よく思い出すのはロシア人研究者のミハイル・ナザルキンさん（ロシア科学アカデミー動物学研究所）や国立科学博物館の若手職員らと一緒に訪問した2010年の夏のことで、もっと正確に言えば晩の歓迎会です。オホーツクの海の幸に加え、白井さんのお気に入りの日本酒をご馳走になりました。白井さんとの会話はいつも楽しいものでしたが、その晩は酒も入っていつも以上に楽しく過ごさせてもらいました。白井さんのおもてなしのお蔭でナザルキンさんも本当にリラックスしているようでした。この時の訪問がきっかけとなり、その後3人の共著論文も出版されました (Shinohara et al., 2011; Nazarkin et al., 2014)。

白井さんはよく軽やかな文章のメールを私に送ってくれました。メールの末尾はいつも「しらひょ (フラット)」でした。このフラット（半音下げる）の意味は、研究がうまくいっていても気分の高揚を抑え、反対に壁で苦しんでいても過度に落ち込まないという意味と想像しています。白井さんはいつも冷静な判断をされた方でしたので。

亡くられるちょうど3ヶ月前のことになりますが、白井さんに献名されたツノザメ属の新種ヒレタカツノザメ *Squalus shiraii* Viana and Carvalho, 2020 がブラジル人研究者により海外の雑誌で発表されました。私は Viana and Carvalho (2020) の筆頭著者であるサラ・ヴィアナさんと2013年に沖縄で開催された第9回インド太平洋魚類国際会議をきっかけに知り合いになっていたので、出版直後にこの別刷をもらいました。その時は日本産のツノザメ類に良い学名が付けられたと感じましたが、著者からの連絡もしくは噂で耳に入るほうが自然で良いと思い、また後輩から先輩へ伝えることに若干気がひけたのもあって、私から白井さんへお伝えすることはしませんでした。タイミング的には論文を見ておられた可能性が高いと考えますが、今となっては白井さんがご存知だったかどうかを確認できません。しかし査読者だったことは大いに考えられるので、白井さんなら「ちゃんと知っているよ。ご心配なく。ありがとう」という返事をくれたにちがいないと思っています。

学会の中でも他者に良い刺激を与えてくださる貴重な方でした。この追悼文を書き進めていると、ご交流のあった方たちと改めて白井さんとの思い出について話し合ってみたくなりました。院生時代から多くの時間を一緒に過ごせた幸せな後輩を代表して、これまでのご親切への感謝とともに哀悼の意を表します。なお写真や情報につ



いては遠藤広光さん（高知大学）、渡辺勝敏さん（京都大学）、今村 央さん、河合俊郎さんおよび矢部 衛さん（北海道大学）にご協力いただきましたので、記してお礼申し上げます。

### 引用文献

- Nazarkin, M. V., G. Shinohara and S. M. Shirai. 2014. Phylogeny and taxonomy of *Petroschmidia teraoi* (Katayama, 1943) (Osteichthyes: Perciformes: Zoarcidae). *Zootaxa*, 3780: 171–193.
- Shinohara, G., K. Matsuura and S. Shirai. 1998. Fishes of Tachibana Bay, Nagasaki, Japan. *Mem. Natl. Sci. Mus.*, 30: 105–138.
- Shinohara, G. and S. M. Shirai. 2005. *Lycodes nishimurai*, a new deep-sea eelpout (Teleostei: Zoarcidae) from the Sea of Japan. *Ichthyol. Res.*, 52: 171–175.
- Shinohara, G., S. M. Shirai, M. V. Nazarkin and M. Yabe. 2011. Preliminary list of the deep-sea fishes of the Sea of Japan. *Bull. Natl. Mus. Nat. Sci., Ser. A (Zool.)*, 37: 35–62.
- Shirai, S. 1992. Squalan phylogeny: a new framework of "squaloid" sharks and related taxa. Hokkaido Univ. Press, Sapporo. vi + 155 pp.
- Shirai, S. 1996. Chapter 2. Phylogenetic interrelationships of Neoselachians. Pages 9–34 in M. L. J. Stiassny, L. R. Parenti and G. D. Johnson, eds. *Interrelationships of fishes*. Academic Press, San Diego.
- Shirai, S. M., R. Kuranaga, H. Sugiyama and M. Higuchi. 2006. Population structure of the sailfin sandfish, *Arctoscopus japonicus* (Trichodontidae), in the Sea of Japan. *Ichthyol. Res.*, 53: 357–368.
- Viana, S. T. F. L. and M. R. de Carvalho. 2020. *Squalus shiraii* sp. nov. (Squaliformes, Squalidae), a new species of dogfish shark from Japan with regional nominal species revisited. *Zoosyst. Evol.*, 96: 275–311.

（篠原現人 Gento Shinohara：〒305-0005 茨城県つくば市天久保4-1-1 国立科学博物館動物研究部 e-mail: s-gento@kahaku.go.jp）

魚類学雑誌 68(1):76-79  
2021年4月25日発行

### 訃報：David Lloyd George Noakes 博士

オレゴン州立大学教授で Oregon Hatchery Research Center (OHRC) 所長を務めておられた David Noakes（出人能玖珠 [ご本人の名刺より]）博士が去る 2020 年 12 月 1 日、骨髄性白血病のためお亡くなりになりました。Noakes 博士は 1971 年にカリフォルニア大学バークレー校で博士号を取得され、ゲルフ大学（カナダ）で長年にわたり魚類行動学における様々な研究を行われた後、2005 年から現職としてサケ科魚類の母川回帰に関する研究をはじめとするサケ学に関する傍ら、OHRC の所長として数多くの人材育成にも関わってこられました。また名刺の裏側には漢字を当てた上記お名前を印刷されるなど日本通としても知られ、アメリカ・カナダのみならず日本にも数多くのご友人・知人研究者がおられました。



写真 1. 来日中の Noakes 夫妻（京都府貴船にて；2011 年撮影）。

周囲に迷惑をかけぬよう、ご自身のご病気については最後まで伏せるよう気を配られていたとのことで、訃報に触れ一同大変驚くと共に深い喪失感を禁じ得ません。筆者一同で博士のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

### Noakes 博士略歴

- 1942 年 8 月 3 日、カナダ・オンタリオ州に生まれる
- 1971 年 University of California, Berkeley にて Ph. D. (Zoology) を取得
- 1972 年 University of Guelph (助教授)
- 1980 年 University of Oxford (客員教授)
- 1995 年 アイスランドにて北極イワナの多様性に関する研究に従事
- 2005 年 Department of Fisheries and Wildlife, Oregon State University (教授)・Oregon Hatchery Research Center (センター長)
- 2012 年 American Fisheries Society Award of Excellence 受賞
- 2020 年 12 月 1 日逝去

### 追悼 David L.G. Noakes 博士のご逝去を悼む

昨年 12 月初めに日本人研究者からのメールを通じて David Noakes 氏（出人能玖珠、ノークスさん）の訃報が届きました。続いて、ノークスさんの息子 Jeff 君を通じて奥様の Pat さんからも。また一人、魚類の生態・行動進化研究を通じて知り合った北米の、著名な研究者であり歳が近い友人を失ってしまいました。その喪失感に今は戸惑うばかりです。彼の初期の研究は、イワナ幼魚の社会行動を対象にしたもので、特にその行動の遺伝性に関するものでした。1970-80 年代の魚類の社会行動に関する研究には、一部から「遺伝性を確かめないで行動進化の理論が優占している」という批判があったように、筆者は思っています。その意味で、彼の研究は一石を投じたのかもしれませんが。その後の研究は多岐にわたり、当方はカバーしきれません。いずれどなたかが記載されることを期待しています。



彼の研究者としての特質の一つは、(1) 国際誌 EBF (Environmental Biology of Fishes) の編集 (逝去時も編集長) と、(2) 多くの研究者を育てたことにあっただけではないでしょうか (特に、アイスランドのホッキョクイワナの多様性研究につながる多数の研究者を育てたこと)。この両方ともに、広義の魚類生態・進化研究の世界的発展に大きく寄与し、将来も寄与していくのではないかと、思っています。なんととっても、一つの学術誌の、はじめから亡くなる直前まで編集責任者の一人を務めるような離れ業をやった研究者は、あまりいないのではないのでしょうか。さらに、国際的な研究会の中心的な人でもありました。筆者が参加したことがある研究会として、イワナ国際学会、魚類の行動・生態・進化研究会 [EEF (Ecology and Evolutionary Ethology of Fishes)] が、特に後者は若手重視の研究会であり、欠かさず出席していたことを思い出します。そしてまた、(3) 大変な日本最良の人でした。知り合いに日本人魚類研究者がたくさんいて、優しい人柄からかどなたもノークスさん最良であったように思います。私にはノークスさんから紹介された日本人研究者が何人もいます。

筆者が初めて会ったのは 1981 年のカナダ・ウィニピグ (Winnipeg) で開かれた第 1 回イワナ国際学会ではなかったかと思いますが、あまり記憶がはっきりしません。札幌で開かれた第 2 回 (1988 年) の折にはすでにこの集まりの中心的な人になっていて、プロシーディングの作り方や編集の仕方など、助けていただきました。その後、2022 年開催予定のイワナ国際学会の日本開催を強く勧めてくれたのも彼でした。初めて会って以来、時には Pat さんと私の妻とともに 1, 2 年に一回は会っていたように思います。その都度、新しい研究者を紹介していただき、筆者の世界がまさに「世界」に広がっていくようでした。ありがたいことだと感謝しています。

アメリカに移る前にノークスさん家族が住んでいたカナダ・ゲルフ (Guelph) の、あの広大な敷地のなかにトゲウオが住む池とカワマスが泳ぐクリークがあり、30 年以上前にイワナを見ながら、「ここで一仕事を」と話し合った若いノークスさんの面影が忘れられません。ご冥福を心よりお祈りいたします。(前川)

#### 追悼 偉大な先輩であり良き友人であった故人を偲ぶ

私が David さんと初めてお会いしたのは、私がポスドクとしてオレゴン州立大に移籍した翌年の 2005 年でした。その年に官学合同研究施設として開園した OHRC の所長として開園式典を主催しておられたのです。当時のオレゴン州知事と並び、冒頭で挨拶をされていたのを今でもよく覚えています。当時は私もスチールヘッド (ニジマス降海型) の研究をしていたため OHRC を訪ねることも多く、その度に暖かく迎えてくださって大変お世話になりました。私がオレゴンを離れる際にも「よい研究者ほど急ぎ足で去っていくね」と言ってくださり、その後は各種学会や彼の訪日時にお会いする度に新たな研

究成果を大変喜んでくださいました。また私が北大に勤めるようになってからは、よい学生を見つけては熱心にサポートされ、彼の推薦でうちの研究室を訪問したり、留学してうちで修士号を取った学生もいました。まだまだ本格的な研究室間交流はこれから、と考えていた矢先の訃報にただただ驚くばかりです。友人と呼ぶにはご年齢もご経歴もずっと上の方ではありましたが、常に対等な立場から穏やかに、近しげに、かつ的確に科学者としての姿勢を示してくれた彼のような方にはもう二度と出会うことは出来ないでしょう。心より感謝と哀悼の意を表します。(荒木)

#### 追悼 David L.G. Noakes 先生

2006 年、David Noakes 先生と最初にお会いしたのはオレゴン州の港町 Newport でした。その年、私は翌春からの短期留学の下見を兼ねて同市で開催されていた魚類学会 (Gilbert Ichthyological Society) に参加していました。当初、会場に知り合いはいないだろうと思っていましたが、発表後、白い髭をたくわえたジーンズ姿の紳士が私に話しかけてくれました。それが David L.G. Noakes 先生その人でした。この時が初対面であり、恥ずかしながら私は彼のことについて、殆ど存じ上げていませんでしたが、懇親会でも楽しい話を聞かせていただき、アウェイでの不安を拭いていただいたことを今でも良く覚えています。翌日は、そこからオレゴン州立大に移動して Supervisor となる Carl Schreck 先生と翌年の研究について意見を交えていましたが、途中、ダウンタウンに出てコーヒブレイクでもしようということになり、彼の居室の扉をくぐったところ、再び廊下の角から David がこちらに向かって歩いてくるのに出くわしました。あとで分かったことですが、David と Carl は同じフロアーに居室を持ち、日に何度も互いの部屋を行き来し、研究室も兄弟のような関係でした。朝、大学に行くと Carl の居室で 2 人が談笑しているところから始まる、というのが留学中



写真 2. 北海道大-オレゴン州立大の交換留学プログラム (オレゴン州コーバリスにて; 左から荒木, David Noakes 博士, 交換留学生; 2015 年 3 月撮影)。

の日課のようなもので、そのため私も両先生から薫陶を受けるという夢のような日々を過ごすことができました。

短期留学から帰国した後も、私は毎年のようにオレゴンに通っています(2020年はコロナで断念)。Davidはキャンパスから1時間ほど太平洋側に走ったところにあるOHRCのDirectorの要職に就いており、ここには私も幾度となく実験で足を運びました。人里から離れた山深い研究所に連日閉じこもっているとなんととも気が滅入るものですが、Davidがほどよいタイミングで祖母から教わったという手製のクッキーを差し入れてくれたりして、研究に没頭することができたのも良い思い出です。いっぽうDavidは、大学の近くのCorvallisに自宅を構えており、そこで初めて奥様のPatにもお会いしました。以降、留学中も、またその後の出張の際にも木立に囲まれたご自宅に頻繁にお邪魔させていただいています。日頃、David邸の玄関先にはオレゴン州立大のマスコットであるBeaversの旗がたなびていることが多かったのですが、私達夫婦が夕食に招かれた時などには巨大な日の丸が掲揚されており、近所でも話題になっていました。多くの方がご存知のように、Noakes夫妻は大の親日家という顔も持っており、その交友関係の広さには目を見張るものがありました。ある時などは夕食後に一枚の年賀葉書を見せられ、「日本の知り合いだけとお前も知っているか」というので私も存じ上げている研究者のどなたかだろうと思ひ、拝見したところ、誰もが知る皇族の方からのもので、それにも驚かされたものです。とにかく、茶目々気もユーモアも洗練されていて、かつ壮大なスケールと深淵な人間性に裏打ちされており、私達夫婦はNoakes夫妻の大ファンになりました。

Davidの研究活動については前川・荒木両先生からも述べられているので、ここでは少し触れるだけにします。というよりも、内向的なDavidは自身のキャリアについて多くを語る事がなかったため、世に知られている以上のことを彼の口から聞いたことはありません。しかし、Patによると彼には直接のお弟子さんがいるのはもちろんのこと、さらにその下のお弟子さんの多くも研究者に



写真3. 10th International Workshop on Salmon Smoltificationでの食事会(ノルウェー・Flåmにて;左手前がNoakes夫妻、夫妻の隣に棟方;2017年8月撮影)。

なっているようで、Patはよく、第2世代、第3世代と呼び分けて、彼らとの再会を楽しみにしているようでした。もちろん、第1世代のDavidも生涯現役研究者を地で行っており、ここ10年の間にもPNAS(Proceedings of the National Academy of Sciences of the United States of America)等にサケに関する研究成果を数多く公表されています。一方で、私は彼の研究姿勢にも心惹かれてきました。Davidは常に魚類を取り巻く環境の悪化を憂いており、問題に対して自身がいかなる役割を演じることができるかを沈黙思考しているように感じられました。彼の背中を見ながら、私もその点においては同じ地平に立てるのではないかと、見様見真似でそれを実践してきたつもりです(ただしそのスケールは依然として彼の方が数十倍大きいことは、言うまでもありません)。

こうして瞬く間に過ぎ去った14年間は、私にとっては間違いなく研究者人生の核心の期間であり、個人的には青春の第二幕のような特別なギフトを頂いた感覚でいます。しかし、世の定理の通り、此処にも至高の時間の終わりが近づいてきていました。2020年12月3日の朝、メールをチェックしていると、見慣れたCarlからのメールが受信箱に入っていました。しかし、「I am so sad to have to share with you the unfortunate news」で始まる一文を読んだ時、不思議とそのメールが何を伝えようとしているのかが頭の中でわかった気がしました。海の向こうから私の背中を押してくれる存在だったDavidが長い旅に先立たれてしまった寂しさや喪失感、私の中ではかなり大きいものです。しかし、そうした悲しみの多くはおそらくは私自身の問題であり、オレゴンに居るPatやCarlたちが抱く感情とは少し異なるものかも知れない、と最近思うようになってきました。彼らの方が齢を重ねている分だけ深い悲しみにも耐えられる、ということではなく、彼らは日々、自他や環境と真摯に向き合い、いつ友人や、あるいは自分自身がそこから抜けても後悔しないという自覚の中で真剣勝負の日々を過ごしてきたと思うようになったからです。

2006年にNewportでDavidが私に話しかけてきてくれましたが、あれはやはりCarlの差し金だったと思われまます。しかし、仮にそうだったとして、最近の私はあの時のDavidのように、初対面の新米研究者に対して誠実に相対することができる研究者になったと言えるでしょうか。オレゴンに移る前、Davidは広大な敷地の自宅を保有し、カナダでは研究者として確固たる地位を築いていたと聞きます。しかし彼はそれまでの生活基盤の一切をたたみ、齢63にしてオレゴンに移り住みました。何が彼を突き動かしたのでしょうか。それに寄り添い、最後まで彼を見守ってきたPatの心境とは、どのようなものだったのでしょうか。Noakes夫妻は、もしかするとここ数年、日本も含む外国に精力的に出かけようとしていたフシがありますが、私達夫婦から見ていて、時に休息が必要ではと感じさせる場面も多々ありました。結局、私たちを含む周囲の殆どが、Davidがホスピスに入るま

で彼が戦っていたのが白血病だったことを知ることはありませんでした。そして David は静かに 1 人、ステージから去って行きました。

David Noakes とは、どのような研究者であり、人物だったと、次の世代に伝えたら良いでしょうか。ある人は、振り返り、彼のことを Giant と表していますが、私たち夫婦は David のことをカナダ生まれの少しお茶目でシャイな侍（出人能玖珠）と捉えているかもしれないね、と話したことがあります。年が明け、生前に David が受けていたインタビュー（David Noakes Oral History Interview: <http://scarc.library.oregonstate.edu/oh150/noakes/video-noakes.html>）の内容を見返してみました。そこで彼は、自分がしていることは恩返しである、と表現していました。おそらく彼は、森羅万象、地球の自然に敬意を払い、その荒廃に誰よりも心を痛め、人生を賭して我々後進のために

粉骨砕身していたのだと思います。David 流のユーモアと茶目っ気を隠れ蓑にしながら、今、残された私たちができることは、我々が慕ってやまなかった David Lloyd George Noakes を、決して最後の侍にしないことです。私も、その志を受け継ぐ者の一人になりたい。そう思っています。David 先生に、心より哀悼の意を表します。（棟方）

（前川光司 Koji Maekawa：〒060-0808 北海道札幌市北区北8条西5丁目 北海道大学 e-mail: kmaekawa@apost.plala.or.jp；荒木仁志 Hitoshi Araki：〒060-8589 北海道札幌市北区北9条西9丁目 北海道大学大学院農学研究院動物生態学研究室 email: araki@res.agr.hokudai.ac.jp；棟方有宗 Arimune Munakata：〒980-0845 宮城県仙台市青葉区荒巻字青葉149 宮城教育大学生物学教室 e-mail: munakata@staff.miyakyo-u.ac.jp）

## 会記・Proceedings

魚類学雑誌 68(1):79-79  
2021年4月25日発行

### 2020年度年会及び関連する会合について

昨年10月31日（土）-11月1日（日）に開催された「2020年度年会（ウェブ大会）」の詳細については、会員通信に掲載されている「2020年度魚類学会年会（ウェブ大会）の準備・開催報告」をご覧ください。

例年は年会時に開催されていた編集委員会、自然保護委員会及び代議員総会は、それぞれ2020年9月4日（金）14:30-17:00、2020年9月22日（火・祝）9:30-12:00、及び2020年10月2日（金）

13:00-15:30にZoomのリアルタイム配信によるウェブ開催として年会の期日より前倒しで実施されました。

また、2020年度会員総会については年会中の開催ではなく、10月22日（木）-11月1日（日）に日本魚類学会ホームページのマイページ上で資料を掲載し、会員の皆様からのご質問とご意見をメールで受け付ける方法によって開催されました。会員の皆様から特にご意見・ご質問は寄せられませんでしたので、翌日に終了とされました。

代議員総会と会員総会の議事録については、日本魚類学会ホームページのマイページ上にも掲載されておりますので、併せてご確認ください。